

北海道駒ヶ岳噴火対策

各種防災対策を行う「北海道駒ヶ岳火山防災協議会」

災害対策の大きな柱となるのが北海道駒ヶ岳の噴火対策です。北海道駒ヶ岳には全国の活火山の中でもトップクラスの台数の観測機器が設置されています。昭和55年には北海道駒ヶ岳周辺1市3町(函館市・森町・七飯町・鹿部町)で「駒ヶ岳火山防災協議会」を設置し、全国に先駆けて「防災計画図(ハザードマップ)」「2種(危険地帯及び交通規制、避難場所及び避難道路図)」を作成し、さらに北海道駒ヶ岳火山防災ハンドブックを全世帯に配付するなど啓蒙活動を行ってきました。平成28年、新たに北海道・森町・七飯町・鹿部町により設置された「北海道駒ヶ岳火山防災協議会」へ事業が引き継がれ、噴火対策を行っています。



火山災害とは

北海道駒ヶ岳の火山災害の要因となる主な火山現象には、以下のような現象があります。特に、高温・高速の火砕流・火災サージは、最も恐ろしい火山災害です。また、小規模の噴火でも、火山灰が堆積しているところに雨が降ると、土石流などの二次災害も発生します。火山現象は、現象ごとに温度や速度、到達距離に違いがあります。居る場所によって避難すべき現象が異なりますので注意が必要です。

- 火砕流・火災サージ
- 大きな噴石
- 火山灰・小さな噴石(軽石)
- 土石流・火山泥流

数百度の軽石や火山灰が周囲の空気を取り込みながら、時速100kmを超える速度で斜面を流下する現象です。発生したときに、火砕流の到達範囲にいると逃げることは困難です。

噴石は、噴火の勢いで火口をふさいでいた岩石を周囲に放出する現象です。北海道駒ヶ岳では、小規模の噴火でも火口から4km以内に大きな噴石が飛散します。

砕けたマグマや岩石が火山ガスとともに噴煙となって上昇し、風下側では火山灰・小さな噴石(軽石)となって降り注ぎます。昭和4年の大噴火では、鹿部町で1mの軽石が積もりました。また、火山灰は、降っている最中は、ほとんど視界がなくなり、道路に積もった灰で車の走行も困難になります。

地表に堆積した火山灰は、雨が降ると泥流を発生し、周囲の土石を巻き込んで破壊力の大きな流れになります。また、積雪期に噴火が起きると、雪が解けて火山灰と一緒に流れる融雪型火山泥流が発生することがあります。火山泥流は、小規模の噴火でも起こる現象で、時速60kmに達することもあります。

日頃の備え!



経験から学び、培った自然災害に対する心得

鹿部町の歴史を語るとき、数々の災害からの復興という事実は重要です。特に昭和4年の北海道駒ヶ岳大噴火の記憶は、今なお鮮明に語り継がれています。また、平成23年の東日本大震災における東北地方の大規模な津波被害も、当町での津波対策をあらためて強化する機会となりました。人の暮らしに豊かさをもたらす自然はときに猛威をふるい、住民の生活を脅かします。鹿部町は過去の教訓を防災対策に反映させ、自然を理解し、共生していくための施策を更新し続けています。



写真:昭和4年 北海道駒ヶ岳噴火の資料

北海道駒ヶ岳の最近の噴火状況

- 平成 8年 3月 5日 小噴火(水蒸気爆発)
- 平成 10年 10月 25日 小噴火(水蒸気爆発)
- 平成 12年 9月 4日 小噴火(水蒸気爆発)
- 平成 12年 9月 28日 小噴火(水蒸気爆発)
- 平成 12年 10月 28日 小噴火(水蒸気爆発)降灰がある
- 平成 12年 11月 8日 小噴火(水蒸気爆発)微量の降灰がある

WATCH!

活火山・北海道駒ヶ岳
町では火山観測体制を整え、危険区域や注意すべき火山被害を想定しています。

内浦湾津波対策

津波の被害を最小限に抑えるため避難経路・避難場所を指定しています

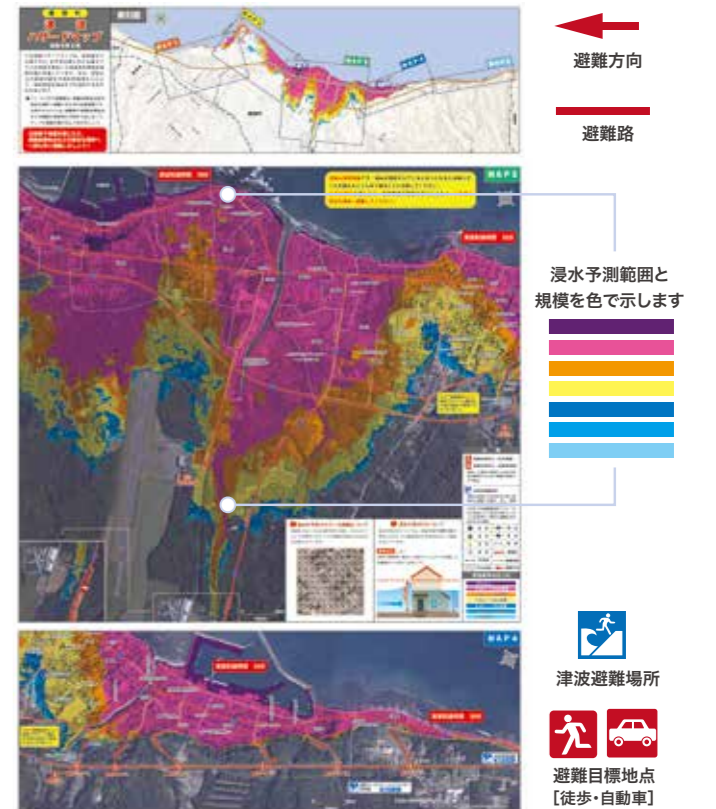
海拔シートを設置

津波が起きた時に備え、標高を示す海拔シートを町内各地に設置しています。また、裏山が崖となっている地区の緊急避難対策として津波避難階段を設置しています。



津波ハザードマップ

津波災害は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災を契機に、「あらゆる可能性を考慮した最大クラスの巨大な津波」を想定した対策がとられるようになりました。このことを受け、北海道から令和3年に鹿部町に到達する最大クラスの津波を想定した津波浸水予測図の提供がありました。町では地震・津波発生直後から津波が終息するまでの間、住民の生命、身体の安全を確保することを目的に「鹿部町津波避難計画」を策定しており、当該避難計画に基づき、津波による浸水範囲や避難路、避難場所など、津波発生時の円滑かつ迅速な避難の確保を図るために、必要な情報を掲載した「鹿部町津波ハザードマップ」を作成し、全町民に配布しています。また、定期的に津波避難訓練も実施しています。



津波ハザードマップは北海道から公表された、太平洋沿岸における最大クラスの津波を想定した津波浸水想定区域図を基に、令和4年3月に改訂されました。

“備え”あれば“憂い”なし

町民を自然の脅威から守るためのインフラ整備と日頃の防災対策



砂防ダム

火山灰は水の浸透性が悪く、噴石なども混じって土石流となって流れてきます。その流れを止め、下流域への土砂流出を防止するための対策として、砂防ダムが整備されています。



自主防災組織

自主防災組織とは、「自分たちの地域は自分たちで守る」という心構えで、地域の人々が自発的に防災活動を行う組織です。平常時には、地域住民へ防災知識の普及を行ったり、防災訓練等を行い、災害時のために備え、災害発生時には、災害情報の収集や伝達、被災住民の救出や救護などの役割を担います。



防災行政無線

屋外拡声機や戸別受信機を介して、町民の皆さんに災害時の緊急情報を伝達するための防災行政無線が整備されています。



防災教育

北海道駒ヶ岳を知ってもらうために、小学5年生には事前学習として登山を、6年生には出来淵崎で噴火の地層について勉強してもらうなど、子どもたちに対しても防災の知識を高めてもらうための取組を行っています。